

漢語近世音と契丹文字漢字音(1)  
—近世音諸説、漢兒言語、入声韻尾の消失—

吉池孝一 中村雅之

鄭氏の近古音

吉池：我々のいう「近世音」についての鄭再發(1966)<sup>1</sup>の分期は興味深いものです。上古や中古という名称に合わせて近古とし、近古を3期に分け、それぞれの期の音特徴を列記します。

近古早期：10世紀初期～12世紀初期

- 特徴：a. 唇音の軽唇音と重唇音への分化。  
b. 非母と敷母の合流。  
c. 莊組と章組の合流。  
d. 于母と以母合流の後、影母への合流。  
e. 全濁音の無声化。  
f. 入声韻尾の消失。  
g. 平声の陰陽分化。  
h. 知組の莊組章組への合流の兆候。

近古中期：12世紀中期から14世紀末期

- 特徴：a. 知組の莊組章組への合流。  
b. 疑母の消失。  
c. 見・曉組の口蓋化の兆候。  
d. *i* 韻母の出現。  
e. 全濁上声の去声への合流。

近古晚期：15世紀から17世紀初期

- 特徴：a. 四等の区別が消失し、四呼の区別が取って代わる。  
b. 見・曉組の口蓋化。  
c. *-m* 韻尾の*-n* 韻尾への合流。  
d. *ɤ* 韻の出現。

中村：現在の目で見ると、唐代にすでに見られる特徴も含まれているようです。

吉池：近古早期の「a. 唇音の軽唇音と重唇音への分化」「e. 全濁音の無声化」、あるいは近

---

<sup>1</sup> 鄭再發(1966)「漢語音韻史的分期問題」『中央研究院歷史語言研究所集刊』36、635-648頁。

古中期の「e. 全濁上声の去声への合流」などですね。しかし、全体としては区分の指標として使えそうです。

中村：近古中期は『蒙古字韻』（朱宗文校訂序 1308 年）『中原音韻』（1324 年）の時期です。鄭再發氏には『蒙古字韻跟八思巴字有關的韻書』（國立臺灣大學文學院、1965 年）という著作もありますから、これを中心にして、それ以前を近古早期、以後を近古晩期とした観があります。

吉池：中村さんも、たしか中村雅之(2009)<sup>2</sup>で近世音の時期は 10 世紀から始まるとしましたね

中村：私は近世音を支えた人と地域を問題とします。それが 10 世紀であったということです。近世音の話し手が、もと非漢語話者として北方にあった人々（すなわち契丹・女真・蒙古など）とその支配下にあった漢人たちである点を重要視します。彼ら北方人の漢語はいわゆる「漢児言語」ですが、それは後に清代北京語となり、さらに南京官話の影響を被りつつ普通話になっていきます。

吉池：明代以降に発達した南京官話は近世音の範疇にいけないのですか。

中村：南京の発音が標準とみなされた 14 世紀末期～19 世紀前半の役人たちの公用語（いわゆる官話）は近世音の対象から切り離して扱います。官話は北京語に絶えず影響を与えてきましたが、両者は区別されなければなりません。現在の普通話の語彙と文法においては南京官話の特徴を濃厚に引き継いでいますが、音韻面では北京音を基礎にしており、南京官話とは大きく異なります。音韻史という観点からは、北京音を中心とする近世音と南京音を中心とする官話を一つの枠で括るのは無理があります。ところで、鄭再發(1966)以降、中国の研究者の論のうち特徴のあるものについてまとめてみませんか。

## 聶氏の 2 大方言説

吉池：聶鴻音(1990)<sup>3</sup>は、漢語と異民族語との対音資料中に反映する下記の漢語音の特徴により、近古漢語（10-13 世紀）を、西安と洛陽の中間線（東経 111-112 度）で、西北（ウイグル文、チベット文、西夏文）と東北（契丹文、女真文、パспа文字文）の二大方言区に分けます。この地理的な区分は唐代初年まで遡り、下つては宋代以後の政治文化の中心の東への

---

<sup>2</sup> 中村雅之(2009)「漢語近世音のはなし—(1)近世音とは何か？」『KOTONOHA』79、1-3 頁。

<sup>3</sup> 聶鴻音(1990)「近古漢語北方話的内部語音差異」『北京師範大学学法』増刊『學術之声』1990、195-208 頁。

移動に伴い近古東北方言が優勢となり、旧来の西北方言の大部分の地も覆い、近代官話の基礎を築いた、とします。

| 中古漢語 | 西北方言       | 東北方言          |
|------|------------|---------------|
| 全濁声母 | 全て有気音      | 平声で有気音 仄声で無気音 |
| 鼻音韻尾 | 消失少ない>消失多い | すべて保存         |
| 入声韻尾 | 消失少ない>消失多い | 消失多い          |

事實上、這種內部差異的真正本質主要不在歷史方面，而在地理方面。我們看到，上述的材料很容易從地域上劃分為兩組；一組是新疆的回鶻文、甘肅的藏文和內蒙古（巴彥淖爾盟）的西夏文，另一組是內蒙古（昭烏達盟）的契丹文和東北三省以至中原的女真文、八思巴文，其間大致以東經 111-112 度綫為分界。我們可以稱第一組方言為近古西北方言，稱第二組方言為近古東北方言。兩種方言之間的主要語音差異如下表：

| 中古漢語 | 西北方言    | 東北方言       |
|------|---------|------------|
| 全濁聲母 | 全部送氣    | 平聲送氣，仄聲不送氣 |
| 陽聲韻尾 | 失落少>失落多 | 全部保留       |
| 入聲韻尾 | 失落少>失落多 | 失落多        |

(410 頁)

這兩個北方方言的語音差異也許在唐代初年便已露出端倪，只是在《切韻》的唐代修訂本中無法得到反映。不難設想，全濁聲母在當時方言中的讀法可能本來就分為兩派，在甲方言中一律讀作送氣的，在乙方言中則一律讀作不送氣的。這樣，《切韻》的編修者只需依清濁的對立把有關的這批字和清聲母區分開，另立一類就可以了，因為《切韻》的目的只是劃分同音字，並不需要注明音值。

最後有一點要說明的是，隨着宋代以後政治文化中心的東移，近古東北方言越來越占據了優勢，進而覆蓋了原西北方言的大量區域，構成了近代“官話”的基礎，而西北方言則漸趨消亡，發展到今天，只有當初作為兩大方言分界的山西中西部地區是一個“斷裂帶”，這裏和絲綢之路沿綫的少數城鎮一起，還或多或少地保留着近古西北方言的某些特點，這也許就是人們常說的“禮失而求諸野”吧！ (413 頁)

中村：音韻史を一本の線で繋がず、西北と東北に分けるといことですね。そのこと自体は賛成です。その2大方言の特徴が、漢語と異民族語との対音資料に反映しているという考え方ですね。

吉池：宋代以降に発達した東北方言が近古東北方言となり、現代北京語に繋がるということです。中村さんは、北方の異民族（漢民族から見て）の“漢兒言語”そのものが、近世音を形作り現代北京語に繋がっていくという考え方でしたね。聶鴻音(1990)とは似て非なるものようです。

中村：そうですね。聶氏は近古東北方言という河南から河北にかけての広い地域で近古漢語が育まれたという考えのようですが、私は北京こそが近世音の発信源だと考えています。漢兒言語の広がりとそれに対する南京官話の干渉が近世音を形成したというイメージです。

吉池：ただ“漢兒言語”という用語の理解が研究者により異なるようです。

## 漢兒言語

吉池：孫伯君(2005)<sup>4</sup>は、契丹語、女真語、蒙古語によって表記された漢語音は、①漢兒言語に基礎を置くとします(68頁)。更に②中原音韻も漢兒言語の音であるともします(69-70頁)。興味深い論なのですが、この場合の“漢兒言語”が何を指すかということが気になります。文面からは今一つはっきりしないのですが、燕雲地域(北京と大同を含む河北北部と山西北部一帯)で話された漢人の言語であり(下線1)、支配者である契丹人、女真人、蒙古人が話した漢語でもあるというように読み取れます(下線2。太田論文からの引用の仕方)。私の誤読かもしれないので、孫氏論文の当該部分を引用します。なお下線は私のものです。

與遼金元稱燕雲及其周圍的北方漢族人爲“漢兒”、“漢人”相應，這一帶人所說的語言被稱爲“漢兒言語”。<sup>1</sup>朝鮮高麗時期以來流行的漢語會話讀本《老乞大》等即把當時漢語稱爲“漢兒言語”。《老乞大》對話如：“你是高麗人，却怎麼漢兒言語說的好？我漢兒人上學文書，因此上些少漢兒言語省的。你誰根底學文書來？我在漢兒學堂裏學文書來。”關於“漢兒言語”，太田辰夫於《關於漢兒言語—試論白話發展史》一文早有論述，認爲：“宋代可作爲口語資料的有詩、詞、話本、禪家及儒家的語錄、諸宮調等，但最接近口語的，仍是這種‘漢兒’及其統治者的話語。這種情況說明，口語跟北朝時一樣是由朴素主義的北方民族及其統治下的漢人正式使用的。這種口語即‘漢兒言語’，它在漢兒中間使用。<sup>2</sup>”“(元代)真正以‘漢兒言語’爲寫作基礎的並不是這樣的文學作品，而應看作是《白話聖旨》、《元典章》、《通制條格》、《永樂大典》中引用的包括着元代口語的文獻，以貫雲石(1286-1324)《孝經直解》爲中心的各種直解類著述等。”太田辰夫把“漢兒言語”的歷史追溯到北朝，而遼金元“漢兒言語”又是與之一脈相承的。由於現存的“漢兒言語”資料多爲元代寫就的，學界研究的也相對較多，如亦隣真《元代硬譯公牘文體》、余志鴻《元代漢語的後置詞系統》、江藍生《後置詞“行”考辯》、祖生利《元代白話碑文研究》、李崇興《元代直譯體公文의 口語基礎》等。有些文章因此認爲形成這種漢語的時間是元代，如李崇興在《元代直譯體公文의 口語基礎》中說到：“以古本《老乞大》爲代表的元代特殊漢語，是在特定的歷史條件下形成的一種漢語變體。鑑於反映這種漢語的文獻到元代纔出現的事實，我們認爲形成這種特殊漢語的時間是元代。”當然，由於遼金時期留下來的文獻資料非常少，如果單純從現存文獻或只就“漢兒言語”的語法進行研究，上述提法是勉強可以

<sup>4</sup> 孫伯君(2005)「胡漢對音和古代北方漢語」『語言研究』25(1)、66-72頁。

的。不過如果從“漢兒言語”的發展史和就其語音、詞彙、語法進行全方位研究，上述提法未免失之過窄。特別要指出的是，遼金元史籍中漢語與契丹、女真、蒙古語的對音資料是研究“漢兒言語”語音的一筆寶貴財富。 (68 頁)

根據周德清在《中原音韻·正語作詞起例》中的論述，我們認為所謂的“中原之音”就是指大都周圍燕雲一帶的“漢兒言語”。《中原音韻·正語作詞起例》曰：“余嘗於天下都會之所，聞人間通濟之言。世之泥古非今不達時變者，呼吸之間動引《廣韻》為證，寧甘受鳩舌之誚而不悔，亦不思混一日久，四海同音，上自縉紳講論治道，及國語翻譯、國學教授言語，下至訟庭理民莫非中原之音，不爾只依《廣韻》呼吸。”“聖朝興自北方，五十餘年言語之間必以中原之音為正。鼓舞歌頌治世之音，始自太保劉公、牧庵姚公、疎齋盧公輩自成一家，今之所編得非其意乎？彼之沉約不忍弱者私意也。且一方之語，雖渠之南朝亦不可行況四海乎？生當混一之盛時，恥為亡國搬戲之呼吸，以中原為則，而又取四海同音而編之，實天下之公論也。”周德清這裏所謂的“都會之所”的“通濟之言”，即所謂的“中原之音”，當指遼金元時期承襲下來的流行於大都周圍燕雲一帶的“漢兒言語”，即後人所謂的北方官話。而且根據周德清的論述，當時“上自縉紳講論治道，及國語翻譯、國學教授言語，下至訟庭理民莫非中原之音”，那麼承自遼金兩朝的元修《遼史》、《金史》中契丹、女真人名、官名、地名等對音漢字的語音基礎理應是“中原之音”<sup>①</sup>。

- ① 朝鮮漢學家申叔舟在《洪武正韻譯訓》(1455)曰：“燕都為萬國會同之地，而其往返道途之遠，所嘗與周旋講明者又為不少，以至殊方異域之使，釋老卒伍之微，莫不與之相接，以儘正俗異同之變。”明示朝鮮所傳“漢兒言語”的時音即所謂“俗音”為“燕都之音”。

(69-70 頁)

吉池：中村さん、たしか遼代の俗語（漢兒言語）について書いていましたね。

中村：厳密に言えば、遼代の俗語ではなく、金代の契丹人の“俗語”です。遼は契丹人によって建てられましたが、女真人の金に取って代わられてからも契丹人は文化的に重要な役割を果たしていました。南宋の洪邁『夷堅志』（12世紀末）の中に、金に派遣された際のことを記した「契丹誦詩」という一節があります。次のような文章です。

契丹小兒初讀書、先以俗語顛倒其文句而習之、至有一字用兩三字者。頃奉使金國時、接伴副使・秘書少監王補每為予言以為笑。如「鳥宿池中樹、僧敲月下門」兩句、其讀時則曰「月明裡和尚門子打、水底裡樹上老鴉坐」大率如此。補錦州人、亦一契丹也。（百部叢書集成・十萬卷樓叢書 による。句読点は引用者。）

これを日比野丈夫(1942)<sup>5</sup>は次のように訳しています。

契丹の小児が初め書を學ぶ時には先づ俗語を用ひその文句を顛倒させて讀む。それで漢字なら一字ですむものが二字にも三字にもなることがある。自分(洪邁)が金國に使したとき、その接伴副使秘書少監の王補といふものが、いつも笑ひ話にそれを聞かせて呉れた。例へば、烏宿池中樹、僧敲月下門といふ兩句の詩は、「月明裡和尚門子打、水底裡樹上老鴉坐」といふ風に讀むので、すべて、この類である。といつて教えて呉れた。この王補は實は錦州の人で契丹出身なのである。

ここに記された“俗語”について、かつては契丹語を指すのだという論が支配的でしたが、素直に漢語の俗語と理解すべきです<sup>6</sup>。その特徴は洪邁も述べているように、文句を顛倒させることと、一字が二字や三字になることです。具体的には「門をたたく」が「門子打」という風に「目的語+動詞」の語順になったり、「門」が「門子」、「烏」が「老鴉」のように語彙が長くなることでしょう。それに加えて、「月明裡」「水底裡」「樹上」の「裡/上」のような後置詞つまり日本語のテニヲハのようなものも観察でき、これらは紛れもなく、元代の老乞大などにも見られる漢兒言語の特徴です。つまり、遅くとも金代にはすでに漢兒言語があった訳で、漢兒言語を元代に生まれたとする論は孫伯君氏の指摘するように無理があると思います。

### 漢兒言語と蒙文直訳体の漢語

吉池：孫氏は“漢兒言語”を燕雲地域一帯の漢語(官話)と理解しているように見えます(誤解かもしれませんが)。しかし普通には“漢兒言語”は特殊な漢語と理解されます。人により“漢兒言語”の理解が異なるので、どうも話がかみ合わないという気がしています。近世音という話題からそれますが、ここで“漢兒言語”について確認をしておきたいのですが良いでしょうか。わたしの理解に問題があるようでしたら、この場で訂正します。

中村：吉池さんの考える漢兒言語はどのようなものですか。

吉池：結論を言うと、漢兒言語は、いわゆる蒙文直訳体の漢語とは異質なものである。

中村：どういうことでしょうか。

---

<sup>5</sup> 日比野丈夫(1942)「契丹誦詩」『東洋史研究』7(2-3)。

<sup>6</sup> 詳しい議論は以下を参照。

中村雅之(2001)「契丹人の漢語---漢兒言語からの視点」『富山大学人文学部紀要』34。

中村雅之(2012)「『夷堅志』「契丹誦詩」に見える「俗語」」『KOTONOHA』112。

吉池：金文京・玄幸子・佐藤晴彦(2002)<sup>7</sup>の理解は一般的なものと思うので、まずそれを確認すると次のようにあります。下線は吉池が付しました。

『老乞大』の主人公は自ら話す言葉を「漢兒言語」とよんでいる。本書ではこれを便宜上、中国語と訳したが、しかしそれは一読して明らかなように語彙、語法の面で通常の中国語とは大きく異なる変則的な言語である。この「漢兒言語」についてはすでに太田辰夫氏の研究があるので、太田氏によりつつ以下その性格について述べてみよう。

「漢兒」というのは、中国周辺の異民族、特に北方の遊牧民族が中国人を指す言葉としてすでに南北朝の頃からみえ、同じ意味の「漢人」にくらべて口語的な言い方であった。周知のごとく中国の特に北方地域は、歴史的に遊牧民族の侵略をしばしばこうむり、時に長期にわたりその支配を受けた。ことに遼金元と三代にわたる征服王朝が中国北方に君臨し、民族間の融合が進むと、この名称が意味する範囲は次第に広まり、元代には漢民族および中国化した契丹人、女真人さらには高麗人までをも含む北中国の住民全体を指すものへと変化した。「漢兒言語」とは、このような民族融合の状況において用いられた一種の共通語としての中国語に他ならない。

この言葉がきわめて変則的なのは、契丹語（モンゴル語の一種）、女真語（満州語の一種）、モンゴル語などが、おおまかに言って日本語や朝鮮語と同じ系統に属する膠着語（「てにをは」などの助辞によって語の機能を示す言葉）であるのに対して、中国語がこれとはまったく系統を異にする孤立語（助辞を用いず、語順によって語機能が決まる言葉）であるため、膠着語を母語とする人々が中国語を学習する場合、その母語の影響によるひずみが出てしまうためであると考えられる。「漢兒言語」に特徴的な句末の「有」や「根底」などの使用、また「俺自穿的不是」（第七十三話、『翻訳』は「不是我穿的」）、「外路的不是」（第七十四話、『翻訳』は「不是外路的」）のような直訳的な語順は、その現われであろう。（368-369 頁）

吉池：「一読して明らかなように語彙、語法の面で通常の中国語とは大きく異なる変則的な言語である。」とありますが、見方によっては、それほど変則的な言語ではありません。第二話を抜き書きします。漢人（漢）と高麗人（高）の対話です。

- 1 漢 恁是高麗人、却怎麼漢兒言語說的好有？
- 2 高 俺漢兒人〔上〕學文書來的上頭、些小漢兒言語省的有。
- 3 漢 你誰根底〔學〕文書來？
- 4 高 我在漢兒學堂裏學文書來。
- 5 漢 你學甚麼文書來？
- 6 高 讀論語、孟子、小學。
- 7 漢 恁每日做甚麼工課？

---

<sup>7</sup>『老乞大 — 朝鮮中世の中国語会話読本』金文京・玄幸子・佐藤晴彦訳注、平凡社、2002年（1998年発見の『老乞大』を底本とする）を参照。

- 8 高 毎日清早晨起來、到學裏、師傅行受了生文書。下學到家、喫飯罷、却[到] 學裏  
寫做書。寫做書罷、師[傳] 行講書。
- 9 漢 講甚麼文書?
- 10 高 講小學、論語、孟子。

中村：1 と 2 の文末の「有」はモンゴル語動詞の a-や bü-などに対応するのでしょうか<sup>8</sup>。これは伝統的な漢語とは程遠い表現です。

吉池：確かに漢語とは言えない表現はあります。しかしそれは一部だと思っています。最大の問題は語順です。下線の部分は動詞＋目的語となっており自然な漢語の語順です。モンゴル語の目的語＋動詞とはなっていません。そうすると、老乞大の漢児言語は、漢語の口語に北方異民族語の要素が加味されたものに過ぎないとも言えます。

中村：吉池さんは、一部のモンゴル語の特徴を以って、それを押し広げ、“漢児言語”全体の特徴とすることはできないと考えるわけですね。

吉池：はい。金文京・玄幸子・佐藤晴彦(2002)では「本書ではこれを便宜上、中国語と訳したが」としますが、“漢児言語”は中国語そのものであり、モンゴル語文を背景に持ちそれを直訳した蒙文直訳体（又は蒙古語直訳体。直訳の程度は一樣ではないであろうが）漢語とは似て非なるものです。おそらく、北方異民族の一部は目的語＋動詞の直訳体漢語を話し、一部は洗練された漢児言語（中国語）を話したというのが実情であろうと思います<sup>9</sup>。太田辰夫(1954;1988)<sup>10</sup>が漢児言語と蒙語直訳体（蒙文直訳体）の漢語を繋げたことに起因し<sup>11</sup>、漢児言語の理解が混沌としているのだと思っています。

### 遼金代の直訳体漢語

中村：南宋の洪邁『夷堅志』（12世紀末）の中に出てくる金代の契丹人の“俗語”についてはどのように考えますか。

<sup>8</sup> 竹越 孝(2000)「蒙漢対訳文献における“有”の対応蒙古語」『開篇』（中国語学研究）20、66-99 頁参照。

<sup>9</sup> 竹越 孝(1994)「蒙文直訳体」と「漢児言語」（『語学漫歩』19号）は、蒙文直訳体・漢児言語という一群の資料について、蒙古語が先にあるものと漢語が先にあるものに分けることを提案する。今回の議論に直接関わるものではないが示唆に富む。

<sup>10</sup> 太田辰夫(1954;1988)「漢児言語について」『神戸外大論叢』5(3)、1954年。『中国語史通考』白帝社1988年、253-282頁所収。

<sup>11</sup> 「しかし“漢児言語”を基礎として書かれたものはこのような文学ではなく、むしろ「白話聖旨」・『元典章』・『通制條格』・『永樂大典』に引かれている元代の口語をふくむ文献、貫雲石（1286—1324）の『孝經直解』を中心とする各種の直解類などであるとみるべきである」（274頁）。



吉池：著者の洪邁が金国に使いをしたとき応対を役目とする王補（契丹人）という人物が笑い話として契丹の小児が初めて書を学ぶ際の話をした一節ですね。

中村：中唐の詩人賈島の五言律詩「李凝の幽居に題す」の3句目と4句目に「鳥宿池中樹、僧敲月下門」とありますが、それを契丹の小児は“俗語”で文句を転倒させて「月明裡和尚門子打（月明かりの下で僧は門を叩き）、水底裡樹上老鴉坐（池の中の木にカラスが止まっている）」と読んだ部分です。

吉池：「門子打」は目的語（門子）＋動詞（打）で、漢語の語順ではなく契丹語の語順です。これは“契丹語直訳体”の漢語であり、老乞大の“漢兒言語”のようなものではありません。当然のことながら、遼金代に燕雲地域一帯に住んでいた漢人は役人も庶民も普通の漢語（文語的か口語的かの差はある）を話したと理解します。契丹の小児の漢語は不自然に感じられたからこそ笑い話となったわけで、それに対して老乞大の言語は笑い話とはならないはずです。

中村：私は文法に関して言えば、漢兒言語の特徴は目的語の前置と後置詞の使用を許容することだと思います。語源から言えば、漢兒言語は漢兒（＝漢人）の言語ですから、「漢語」と同義です。漢兒も漢人も北方の中国人（漢字文化に浸った人々）を意味し、かつそこには契丹人や女真人で漢文の教養をもつ者も含まれます。太田辰夫氏が漢兒言語を北方諸民族の共通語として捉えたのもそのような背景があるからです。しかし、そこにはある程度の内部差異があったと思われ、契丹人や女真人の漢語には目的語の前置と後置詞の使用という特徴が比較的多く表れ、狭義の漢人の言語にはその特徴が少なかったというのは吉池さんの言う通りでしょう。しかし（狭義の）漢人の言語といえどもその特徴を許容し、自らも用いるようになったことは、老乞大からも見て取れます。「漢兒言語説的好（漢兒言語をうまく話す）」「誰根底〔學〕（誰に習う）」のような例です。

吉池：中村さんの言う“しかし（狭義の）漢人の言語といえどもその特徴を許容し、自らも用いるようになったことは、老乞大からも見て取れます”ですが、漢兒言語（言語の特徴ではなく実在した言語・老乞大の言語を指す）は元代北方の“（狭義の）漢人”にとって特殊なものでも変則的なものでもなかったということを含意するのならば私も賛成です。

中村：繰り返しになりますが、定義としては“漢兒言語”とは北方の漢語にはほかなりませんから、あえて（狭義の）漢人の言語に限る必要はないのではないのでしょうか。むしろ私は、アルタイ諸語の影響こそが漢兒言語を特徴づける最大の要素だと思いますので、（狭義の）漢人よりも漢化した契丹・女真・蒙古の人々の言語の方に関心があります。彼らの言語こそが近世音の主流になったと考えています。もっとも、語彙や文法はともかくとして、音韻面

に関して言えば漢人の言語と諸民族の言語にほとんど違いはなかったのではないのでしょうか。その意味で近世音を漢児言語の音韻と定義しても差し障りはないと思うのですが。

吉池：音韻についてですが、元代においては漢人と北方異民族の漢語に違いはなかったかもしれません。しかし遼金代ではどうでしょう。両者に違いがあったという可能性はないでしょうか。例えば入声韻尾です。契丹人の漢語ではほぼ脱落していたが、燕雲一帯の漢人の漢語ではまだ残っていたというようなことがあったかもしれません。鄭再發(1966)は近古早期の特徴の一つとして「f.入声韻尾の消失」を挙げているわけですが、入声韻尾-p, -t, -kの三種すべてが消失したというのではないでしょう。

### 入声韻尾の消失

中村：鄭氏は何に拠って近古早期（10-12C）に「f. 入声韻尾の消失」の項目を入れたのでしょうか。

吉池：『皇極經世聲音唱和圖』です。鄭氏によると、この図の作製年代は1011-1077年で作者の劭雍の籍貫は洛陽です。鄭氏は陸志韋(1946)<sup>12</sup>の分析に拠ったとのこと。言うまでもないことですが契丹文字の研究は緒に就いたばかりなので利用されていません。

中村：陸志韋(1946)はどういうことを言っているのですか。

吉池：陸氏の原文にある「総括十声図」の一、四、五、七声（71-71頁）と、その説明（75-76頁）を引用します。これによると、下線のような慎重な表現もありますが、入声韻尾の-tおよび-kを持つ字を陰声に配し、-pを持つ字を陽声の-mに配すことより、当時-tと-kは消失していたが-pは保存されていたと考えていたとして大過は無いようです。

|    |   |      |      |   |      |      |
|----|---|------|------|---|------|------|
| 一聲 | 日 | 多可个舌 | 果攝開  | 月 | 開宰愛○ | 蟹攝開  |
|    | 星 | 禾火化八 | 果假攝合 | 辰 | 回每退○ | 蟹攝合  |
| 四聲 | 日 | 刀早孝岳 | 効攝開  | 月 | 牛斗奏六 | 流攝開  |
|    | 星 | 毛寶報霍 | 効攝合  | 辰 | ○○○玉 | 流攝合  |
| 五聲 | 日 | 妻子四日 | 止齊攝開 | 月 | ○○○德 | 止齊攝開 |
|    | 星 | 衰○帥骨 | 止齊攝合 | 辰 | 龜水貴北 | 止齊攝合 |
| 七聲 | 日 | 心審禁○ | 深攝開  | 月 | 男坎欠○ | 咸攝開  |
|    | 星 | ○○○十 | 深攝合  | 辰 | ○○○卅 | 咸攝合  |

(71-71頁)

<sup>12</sup> 陸志韋(1946)「記劭雍皇極經世的“天聲地音”」『燕京學報』31、71-80頁。

同理，我們可以推求第一聲，第四聲入声字。

‘多’ ta 配 ‘舌’ -( )ʔ ‘舌’ 字的主元音不能詳擬，只知道是 a 類。然而收聲是ʔ，也許仍然是切韻的 -t。

‘火’ xua 配 ‘八’ -u( )ʔ 參上。

‘刀’ tau 配 ‘岳’ -( )fi 這裡跟 u 同類的收聲應當是中原音韻的fi，不能作切韻的-k，或是現代方言的ʔ。

‘毛’ m<sup>w</sup>au 配 ‘霍’ -u( )fi 參上。

‘牛’ ŋiəu 配 ‘六’ ləuʔi ə不是寄生音。l 之後，中古介音 i 有時變成近乎ə的音，有八思巴音跟西儒耳目資可證。

○ 配 ‘玉’ -iuoʔi (從切韻ɰiwok)

而然第七聲的‘十’跟‘卅’何以配陽聲，仍然不能明了。除了收聲不同之外，緝韻的‘十’跟第五聲所收質韻的‘日’是同形式的。‘卅’跟第一聲所收的‘舌’，在唐朝之後，也應當同形式。也許這方言的唇收全然沒有失去。‘心男’收-m，不同‘臣干’收-n。同樣的，‘十卅’還是收-p 的。 (75-76 頁)

中村：陸志韋氏の結論には大きな疑義はないのですが、「岳」などの入声韻尾 [fi] は理解不能です。藤堂明保(1980:139)<sup>13</sup>に「岳」/ŋjaw/とあるように/-w/ (すなわち [-u]) と理解すべきものでしょう。

## 平山氏の説

吉池：日本の研究者による声音唱和図の分析に平山久雄(1993)<sup>14</sup>があります。この図の基礎方言は「その基礎はやはり当時の文化的政治的中心地域である汴洛一帯の標準語にあったと見るべきであろう。」(102 頁)とし、入声については音韻論的には入声韻尾/-p//-t//-k/ (平山氏は/-p//-t//-c//-k//-wk/とする)が存在し、[-p] 以外は音声的に弱化しており [-ʔ] [-ʕ] [-k] となっていたとします。やや長くなりますが平山論文から「3.3.1 入声韻尾について」と「3.3.2 「一声」の音価」を引用します。

### 3.3.1 入声韻尾について

『唱和図』では、韻尾-p に終わるものが陽声-m に配されるのを除いては、入声韻母は一般に陰声に配されている。これまでの研究ではこの事実に基づいて、中古音の入声韻尾 -p, -t, -k は『唱和図』では -p のみが保存され、-t, -k は既に脱落していた、ないしは声門閉鎖音 -ʔ に弱化していたと見られている。-k については、李榮 (1956 : 169 頁)・

<sup>13</sup> 藤堂明保(1980)『中国語音韻論—その歴史的研究—』(光生館)。

<sup>14</sup> 平山久雄(1993)「劭雍『皇極経世声音唱和図』の音韻体系」『東洋文化研究所紀要』120、49-107 頁。

陸志韋（1946：75-76頁）・長田夏樹（1979：31-32頁）など、単なる脱落或は -ʔ への弱化ではなく -i(-j), -u(-w), -fi 等の音に変化していたと見る論者もある。藤堂明保（1957：117頁）は -p もまた声門閉鎖音に変化していたと見るが、その理由を説明してはいない。李思敬（1988）は当時の汴洛地域には -p を保存した発音と -p を脱落させた発音と二種あったと見る。

これに対して私は、音韻論的には入声韻尾 /-p//t//k/ がなお存在していた（但し私はそれを /-p//t//c//k//wk/ と見る）と仮定して、『唱和図』入声韻母の音価推定を行いたい。この前提からも『唱和図』の“声”体系が十分に解釈が可能であることを示したいと思う。音声的にはある種の弱化が生じていた可能性は当然考えられる。

### 3.3.2 「一声」の音価

「關日」{at}

/kat/ [kaʔ] 「葛」（曷一開） /kjat/ [kʰaʔ] 「戛」（黠二開）

/\*kiat/ [kraʔ] 「傑」（薛三開） /kjiat/ [kieʔ] 「結」（屑‘四’開）

「翁月」{uat}

/kuat/ [kuaʔ] 「括」（末一合） /kjuat/ [kuaʔ] 「刮」（鏜二合）

/\*kiuat/ [kyaʔ] 「厥」（月三合） /hjuat/ [xyeʔ] 「血」（屑‘四’合）

これらは韻尾ゼロの陰声{a}{ua}に配されているので、韻尾 /-t/ を認めることには異論があろうが、次の理由からそれを認めてよいと考える。

音韻論的には /-t/ があっても、音声上では、舌先のごく軽い閉鎖、或は閉鎖までに至らぬ舌先の僅かな前進、更には主母音を平・上・去声におけるよりもやや前寄りに実現させる力となるなど、さまざまな弱化的形態が考えられる。これらの弱化的形態には声門閉鎖音が伴って、入声の短促性を保持していたであろう。

このような種々の弱化的可能性を含めた意味で「一声」及び「五声・關日／翁月」の入声韻尾を [ʔ] と表記する。この表記は舌先の閉鎖を必ずしも意味しない。但し主母音が比較的狭い「五声・關日／翁月」では音声的弱化的程度が相対的に小さく、舌先の閉鎖を伴っていた可能性が大きいと見る。

以上 /-t/ について述べたことは、他の入声韻尾即ち /-p//c//k//wk/ についても同様である。但し /-p/ の場合には両唇の閉鎖伴わない形での弱化的は困難であろうから、弱化的していたとしても恐らくはそれは緩い両唇閉鎖音となっていたに過ぎないであろう。

(87-89頁)

吉池：入声を陰声と陽声に対応させる事実を、弱化しない音声[-p]と弱化した音声[-ʔ] [-ʰ] [-ʔ] で説明するわけですが、この点はいかがでしょう。私は、話し手（書き手）の脳裏にある発音の形（音韻観念）に照らして言語活動（『唱和図』の作製に伴う言語活動）を行うはずだという立場に立つと、どうも納得がいきません。

中村：同感です。音韻資料の検討においては、当時の人が発音した“つもり”の音がどういうものかを追究することが重要です。[-l] [-<sup>h</sup>l] [-k] のような弱化した音声は異音としてはありえてもそれを脳裏に描いていたとは考えられません。また氏が音韻論的に想定している/-p/、/-t/、/-k/などを脳裏の音として想定すると、なぜ音図にそれが反映しないのかが問題になります。

吉池：いずれにしても、『唱和図』とほぼ同時代か、それよりやや早い時期の遼代契丹人の漢語音は、当時の状況を知る有力な資料となるので、その検討は興味深いものです。

中村：それでは今回はここまでとし、次回から契丹文に見られる漢語借用語について検討します。まずは入声について検討しましょう。